

不妊治療現場の過去・現在・未来

<最終章>

家族の変遷と無限性

荒木晃子

第12章 あの日

「ありがとう」

ぼろぼろと、ことばが、彼女のくちからこぼれおちた。

「うまくいえないけれど、ほんとうに、ありがとう」

はにかんだ笑みを浮かべ、涙がひとすじ頬をつたう。

「よかった・・ほんとうに、あなたに読んでもらって、よかった・・」

自分に言い聞かせるように、安堵の表情でそうつぶやいた彼女を確認し、ほっとする。共に泣き・笑う、互いの顔がおかしくて、おもわず同時に声を出し「フッフ」と笑みをかわした。

「これで、やっと“私の話”ができる」

B子さんは、そう明るく言い放ち、間髪をいれず語り始めた。

「1.17」のつめあと

「あなたが指摘した、裁判の“初め”と“終わり”に、私が書いた文章のことだけど」

これまでに、耳にしたことの無いB子さんの声色だ。事務的で、ある意味、厳しい口調にも聞こえる。おもわず身が引き締まる思いがした。

「おそらく、そのことについて話すことが、“あなたに聴いてほしかったこと”につな

がるような気がする。きっと、それが、“私が言いたいこと”なのかもしれない、とも思う。勿論、話してみないとわからないけれど」

聴きながら、顔がこわばり、緊張しているのが自分でも分かる。私の様子を察してか、B子さんは、少しだけ笑顔を見せた。

「あの裁判が終わるまでは、確かに、私には家族があったの。いま思えば、夫がいて妻がいる、みたいな典型家族。義理の関係だけれども、それでも家族で。そこには嫁姑の確執や、小姑と呼ばれる義理の姉妹もいたわね。たまに、実家に里帰りすると、羽を伸ばして両親に甘えることもできたし・・良いことも、そうでないことも、ぜんぶまとめて、カ・ゾ・ク、みたいな、典型的な家族だったと思う」

ここまで話すと、彼女は一旦話を切った。次に、神妙な顔つきで、ゆるりと椅子を引き寄せ、持参したペットボトルで喉を潤す。

「あの裁判の最中に阪神淡路大震災が起きた。今から17年前に起きた大地震よ。知ってるでしょう？あの日、1月17日の早朝、自宅で休んでいた時のことだった。カレと二人で、散乱した部屋からおもわず外へ飛び出すと、道路が盛り上がり通行不能になっていて、部屋に戻った。自宅マンションにも亀裂が走り、水道・電気・ガスすべての生活機能がストップしたわ。幸い建物の

倒壊は免れそうだったので、余震の中、携帯で互いの家族の無事を確かめた。忘れてはいけないし、忘れられないほど恐ろしい思いをしたわね、あの時は。みんなそうだったと思う。震災を経験した人たちが、みんなそうであったように、私たち家族も全員、震災の被災者だった。たくさんの方々が犠牲になった中で、命が助かっただけでもよかったね、って、直後は家族で喜びあってただけだね。・・実は、本当に大きく揺れたのは、そのもっとあと。ずいぶん時間がたってからだったのよ」

何も言わずに首をかしげ、瞬きを繰り返す私の目は、彼女を食い入るように見つめたままだ。

「あ、揺れといってもね、地震の揺れじゃないのよ！もちろん、家業や他にも、それぞれに地震の膨大な影響も受けてみんな大変だったし、実際に、その後の余震もずいぶん長い間続いていたんだけど、その揺れじゃあなくて・・そうね・・強いて言うならば、“私に起きた二次災害”、とでもいうのかしら？ “その揺れ” が原因で、家族に亀裂が走ったの」何か質問はない？ とでも言いたそうな、確認する視線を感じた私は、急いで首を横に振る。いまは話を遮りたくない。

「あの頃は、みんなほんとうに大変だった・・家族を失った友人や、住む家を失った知人などに、できる人が、できるだけ支援を心がけていたわね。私もカレも、同じ思いだったと思う。一時期などは、もう、裁判どころじゃない、って感じ。そんな時・・」

ことばが詰まり、一瞬すべての動きが止まったかに思えた。息をすることさえも忘

れた瞬間だった。B 子さんの目が、私から離れた。

「私」に起きたこと

「震災後、復興に皆があくせくしていた時、ひとりの女性が、カレに助けを求めたの。カレが時折、夜の接待で利用していた飲食店で働いていた女性だったと、あとから聞いた。被災地の中心部で一人暮らしをしていたらしく、その近辺の取引先に支援物資を届けに行くついでに、何かと援助していたらしい。その辺りの話までは、元々何でも話す夫婦だったし、男性・女性関係なしに互いの交友関係はオープンだったので、情報として知っていた。“こんなときだから、助け合わなきゃね”、って話もしていた。でもね、その後・・といっても、まだ半年もたたない時期のことなんだけど・・実は、カレがその女性と関係をもち妊娠したことを、カレから打ち明けられたの」、おもわず全身が硬直した。握りしめた両手のこぶしに汗がにじみ、爪が手のひらに食い込み痛い。同時に、ひやりとした感覚が額に走る。それらは、いま、私が冷静さを保つために必要でもあった。自分でも気づかぬうちに結んだ唇をかみしめていた私は、微動だにせず、彼女の次のことばを待った。

「ショック・・だけでは済まされない、もう、言葉にはできないほどの衝撃だった。一瞬、目の前のカレが“何を言っているのか” 分からなかったし、それが“どういうことなのか” も全く理解できなかったと思う。ほら、よく言うでしょう？ “一瞬、アタマノナカガ真っ白ニナル” って。そんな感覚だったわね～」

凍りついたまま、一言も発することができ

ない。奇しくも、聴き手の私自身、何も反応できない状態にあったと思う。

「ごめんなさいね、こんな、ドロドロした話で・・・」

そらした目線は、いつのまにかこちらへ向かい、様子をうかがっているようだ。フィードバックもなく、見るからに緊張した様子の聴き手を気遣い、反応を確認しているのだ。咄嗟に、アイコンタクトで了解のメッセージを送り、あらためて気を取り直し、姿勢を正す。せめて、「大丈夫です。安心してお話してください」のひとことを伝えたい。しかし、気持ちとは裏腹に、その時私にできたことは、ぎこちない笑顔で、まるで子どもがイヤイヤするように首を左右に振るのが精一杯だった。

「ありがと・・・じゃあ、話を続けるわね？」あわてて、左右に振っていた首を縦に振る。すでに、話の主導権は話し手にあった。

「そう、少なくとも、私にとっては、単なる“夫の浮気話”や、“夫が家庭の外に子どもをつくった話”では済まなかった。場所は、時折ふたりで宿泊するお気に入りの常宿だったんだけど、話を聞いた後は、息苦しいというか、息ができなくなって・・・もう何も考えられなくなってしまい、それ以上話すこともできず、夜中なのに部屋を飛び出し、車を運転しひとりで自宅へ戻ったの。その夜の記憶は定かではないわ。いったい、どの道を通して、どんな格好で帰宅したのかもよく覚えてないの。よく無事に帰れたなあって思うほどよ。ね、変な話でしょ？ただ一つ覚えているのは、身体の震えが止まらなかった、ってことだけ。ハンドルをもつ両手が震えて、身体中から汗が噴き出して・・・さむくて、さむくて、初

夏だというのに、歯がガチガチ音を立てて震えていたのを覚えてる。そうね・・・大震災に遭遇した時よりも、震えていたわね。

そう、こんな風に」

彼女は両手を差し出し、広げた手のひらを、でんでん太鼓を振るように振って見せた。それから、じっとみつめる私の目線を捉え、笑いかける。

「ね？すごいでしょ？でも、決して、大袈裟じゃあないのよ。本当に、こんな感じで、身体中が震えていたの。それがしばらく続いたかなあ・・・まあ、それから10日間ほどは、私にとって地獄の日々だった。少しオーバーに聞こえるかもしれないけど、その時の私にとっては、そうとしか思えなかったのよね。まあ、あれ以上に辛かったことはない、今でもいえるほどだから、余程だったと思う」

話し始めた頃は、開いた口から洩れることばは重く、静かだった。しかし話が進むごとに、徐々に、普段のB子さんの軽快な口調が戻り、表情も豊かになりつつあった。逆に、私にとって、彼女の話はあまりにも衝撃的で、返すことばも、どう反応してよいかもわからない状態が続いていた。私は、自身の五感にたより、その反射に身を任せることにした。

「ホント言うとね・・・その10日の間に、私はもう“いない人間”なんだ、って考え始めてた。子どもも産めないカラダでは、生きている資格がないんだって。その女性がカレの子どもを産んだら、私はきっと邪魔になる。自分は死んだ方が、みんなの為だって。いま考えると、自分でも怖いくらいの発想なんだけど、でも、その頃の私には、そうとしか思えなかったの。“産めない

子宮”が自分の身体の中にまだ残されていることさえ、耐えられなかった。自分ひとりでは昇華しきれない悲しみや怒り、そして孤独感にとらわれていたから。でも、今ならわかる気がする。自分が自分でなくなるとか、自分を見失うという感覚が。例えば、不妊治療の結果、医療事故に遭い、裁判の公判中であっても、大震災で大変なことになっていても、カレと二人なら頑張れたし、どんなことがあっても平気だと思っていた。子どもがいなくても、私は“ひとりの女性として”充分幸せだったし、不妊治療していることで、まわりみんなが私の努力を認め、不妊であることを許してくれていたような気がしていたのね。そのことを知るまでは。その女性の存在を・・・ん？ちょっと違うな・・・ああ！そうだ！他の女性が“カレの子どもを産む”と知るまでは、よ！だって、それは、ずっと私が“自分の命をかけて願い続けていた”ことだったんだもの。それが、一番つらかったのよね・・・きっと。そこから自分を取り戻すまでは、容易ではなかった。特に、それを知った直後はね。しばらくは、そうねえ・・・少なくとも、その地獄の日々？の間、昼も夜も、ずっと泣き続けていたくらいだから。そう、まったく眠ることができなかったの。きっとその時に、もう、一生分の涙を流したかもしれないわね～。食事ものどに通らず、一睡もできなかった。一切何も手につかず、ただ泣いてばかり・・・今でも、思い出すと、ちょっと辛いかもしれないわね。というか、その頃の自分を“かわいそうだったな”って、最近、やっと思えるようになってきたかな？う～ん・・・ちょっと違うかもしれないなあ。ああ！そうよ！たった今、話しな

がら、既にそう思えるようになっていたんだって、わかった気がした」。

それまでに、彼女のことばは何度か途切れていた。なのに、やはり何も返せてはいなかった。話の途中、「そんな・・・」とか、「えっ?!」といった、相槌とはいえないほどの感嘆句をはさむだけが精いっぱいだったのだ。考えが脳裏に浮かぶ間にも、沈黙の時間が流れる。「えっと・・・でも、どうやって・・・」、しどろもどろに発した私のことばを、まるで何も聞こえなかったかのようになり、彼女が勢いよく遮った。

関係性に見る本質

<友>

「その話を聴く前、もちろん震災の後だけど、私は積極的に避難場所になっていた母校の体育館に支援物資を運んだり、仲の良い近所の友人たちと共に支援活動に精を出していたの。それが、ある日を境に、突然連絡を絶ったもんだから・・・特に仲が良かった友人たちが心配して、私の安否を確認し始めた。玄関のドアをたたいたり、留守電にメッセージを入れたりしてね。それでも何も反応がないので、終日カーテンを閉じたマンションの自宅へ、ベランダを乗り越えて訪ねてきてくれたり・・・ほんとに、ありがたかった！実はね・・・さっき話したと思うけれど、その頃、これ以上生きていくのが辛すぎて、どうやって死のうかと考えていた時期が、一瞬だけあったの。ある日、自分の下腹部を刺すつもりで包丁を握っていたら、突然友人が訪ねてきて・・・もし、あの時彼女が訪ねてこなかったら、今の私はなかったと思う。悲しみを誰にも言えず一人で抱えていたし、自分の身体を

恨んでもいた。苦しくて、生きていることを忘れたかのように、ただ泣き続けていた私は、彼女たちに救われたようなもの。医師をしている友人女性は、触診で“不整脈が出ているから”と、即刻入院の手続きをしてくれた。一番親しい友人は、毎日、一日に何度も電話をくれたり、顔を見るために連日訪ねてくれたり・・入院して分かったことなんだけど、飲まず食わずで10日も過ごしたので、脱水症状と不整脈を起こしていたらしい。診断は、『心因性のショック状態』だったと聞いた。ほ〜んと、ひどい話よね。もう二度とあんな思いはしたくない！というか、この歳ではしたくてもできないけどね！でも、友達って、本当にありがたいと思った。日常の中で築いた人間関係だけど、何かが起きた時には、生活する周辺の間人間関係がとても大事だということ。震災の時もしかり、私に起きた一大事のときも、みんなに助けもらった。彼女たちには、今でも感謝を忘れてはいないのよ」

ここまで話すと、B子さんは椅子の背に身体をゆだねた。肩を落とし、身体の力が抜けたようにゆるやかに微笑んでいる。その様子が少し満足げに映るのは、気のせいではないだろう。身体の緊張が多少解けたせいか、二人とも、ぼろぼろと涙が止まらなくなっていた。しかし、互いの顔には、どこかほっとした様子が浮かんでいる。

「少し休みませんか？」

そう声をかけたのは、B子さんだった。

<夫婦>

時間を決めていたわけではない。部屋に戻ると、陽だまりの中で、机に投げ出した

両腕に額を寄せ、彼女が気持ちよさそうに目を閉じている。その表情からは、誰も、先ほど語った人生をうかがい知ることはできないだろう。私には、彼女にたずねたいことがさらに増えていた。しかし、それが彼女の語りたことと一致しないのならば、いたしかたのないことだ。この空間は、彼女がつくり上げるものなのだから。そんなことを考えていた私の視線に気がついたのか、B子さんは、おもむろに起き上がり、壁にかかる鏡の前に立つ。少し乱れた髪を両手で整え、鏡越しに映る私を横目でチラとみた。振り返った彼女の顔には、いつもの笑顔が戻り、その目は、「さあ、仕切り直しよ」と私を誘っていた。

「えっと、さっきはどのあたりまで話したかしら？」

先ほどの話を、時系列に沿って整理しながら、かいつまんで要約する。途中からは、彼女も思い出しかけたのか、そうだったわね〜、と相槌が入った。要約の最後には、「B子さんがご友人に支えられて、最も辛い10日間を過ごしていた時、ご主人はどうされていたのですか？」と尋ねてみた。

「そうだったわね。カレのことはまだ話していなかったっけ。そう・・その夜、カレが私に言ったのは、『君と離婚する気はない。でも、その女性は子どもを産むと言っている』という内容だった。それを聴いて、動揺してしまったの。婚姻関係が何も変わらないのであれば、それはそれとして、割り切るというか、ある意味、開き直ることもできたと思う。私がショックを受けたのは、その女性はいつでもよくて、カレの子どもが産まれる、という事実だったの。もちろんその時は、まだ産まれてなか

ったけれど、私にとって、産むのはアカノ他人であっても、産まれてくる子どもは、夫の子どもでしょう？そこが苦しきの原点だったの。だから話を聞いた次の日から、互いを拒否することはしなかった。普通のサラリーマンではないので、夜は遅かったけれど、いつものように仕事を終えて毎日帰宅していた。でも、自宅では連日、私が一睡もできない状態で泣いてばかりいて、いつものような会話ができなかった。今から思えば、多分、とりつくしまがなかったと思う。二人の関係はぎくしゃくするし、私の友人や、カレの友人たちでさえ、私の味方をしてきていたので、カレの身の置き場もなかった。弁護士からは、次回公判日の連絡も入ってくるしね。当然のように、日常生活を普通に維持することが難しくなっていた。それからしばらくして・・・え～っと、2、3カ月後位かな。信頼する友人から、『その女性と一度直接話したほうがいい』とアドバイスをもらった。もちろん、カレにも話したわよ。そして、その友人同伴で、その女性に会いに行ったの」

確か、私は、ご主人のことを尋ねたはずだった。夫婦として、どういった関係性の変化があったか、が気になっていたのだ。しかしB子さんの意識では、“夫婦関係に起きた問題”とは捉えてはいなかったのかもしれない。彼女はその時すでに、“子どもの存在ありき”の解決に向かっていているように思える。私は、そのまま聴き続けることにした。

<第三者の介入と策略>

「その女性（Mさん）の住まいは、ある人

が私に教えてくれた。そのひとは、共通の知人で、カレの身近にいた人だった。もっとも、私が知りたくて得た情報ではなかったけれどね。親切心からか、同情心からか、今となってはどちらでもいいけれど、とにかく、よかれと思って教えてくれたことは間違いない。丁度その頃、苦しむ私を、みるに見かねた友人が、『思い切ってその女性と会い、今後の身の振り方を決めたほうがいい』とすすめてくれたの。Mさんに会うことは、私にとってとても勇気がいることだったのよ」

ここまで話し、ちょっとタイムね！と声をかけ、大きく背伸びをしながら深呼吸をしたのち、彼女は再び話し始めた。

「先に、その時の状況を説明するわね。Mさんが住んでいたのは、カレの実家のすぐ近くの賃貸マンションだった。短い時間だったけど、友人と私、そしてMさんの3人で話をした。初めて会うMさんは、大きなお腹を抱えていた。辛かったなあ・・・不妊治療をしているとね、妊婦さんや赤ちゃんをみるのも辛くなるときがあるのよ。おそらく、出産日が近かったんだと思う。ねえ、目の前の女性のお腹のなかに、自分の夫の子どもがいるなんて・・・想像できる？私は今でも、“きっとあれは悪い夢をみたに違いない”って思うのよ。それくらい、非現実的だった。現実には小説より奇なり、とかいうけれど、本当にそうね！まあ、あれから年月がたち、今だから、過ぎたこととして、こうして思い出すことができるようになったからいいものの・・・こうやって、話ができるようになるまでには、ずいぶん時間がかかったわね～」

この時、私の脳裏に浮かんでいたのは、2011

年インド在住の女性が、妻の同意なしに、夫である日本人男性の子どもを代理出産で出生し、子どもが一時的に無国籍状態にあったケースだった。

「私は、最初に友人と打ち合わせをしたとおり、できるだけ感情的にならず、最低限必要な話だけをした。その会話のなかで、一番印象に残った M さんのコトバがあるの。それはね、『あの震災があり、ひとりはいやだと思った。奥さんは、病気で子どもが産めないと聞いていたから、ワタシが子どもを産んであげることにした。子どもを産んだら、カレも結婚してくれるだろうから』といったこと。話し始めた最初の頃だったんだけど、なんというか、あまりにも自分勝手に、母親になろうとする女性のことばとは思えなかった。反対に、それを聞いた友人のほうが、おもわず“なんてことをいうの！！”って、声を荒げたかな。それまで、自分でも思った以上に冷静でいられた私も、さすがにそのことばには傷ついたわね。なんだか、宇宙人と話しをしている感覚というか……。ああ、この人には、ことばが通じないんだな、常識を踏まえた大人同士の話ができないんだな、って感じたかな。そんな風に考えだしたら、『そうか、カレは、この女性でいいんだ。子どもさえ生んでくれたらいいんだ』と思えてきて、なんだか、憑き物が落ちたようにスーッと楽になったの。怒りや悲しみ、それと、悔しさに加えて、当然のように、嫉妬もあったはずなのに、なんだか、胸のなかのスーツとして、『あ！もういいや！』って気分になったのよね～不思議だった。そういえば、去年東北で起きた震災の後、独身者の結婚願望が高くなったとか、家族の絆の大切

さが強調されていたけれど、それを聞いたときは、“どうか私と同じような目にあう人がいませんように”って祈った。でね、そのあと、聞きたいことがまだ残っていたので聞いてみた。“産まれた子どもに父親がなくてもいいですか？”って。なんだか、変な質問よね？でも、その時はまだ、私たちには離婚の話なんて出ていなかったし、カレも離婚する気はない、って言っていたから。ただ、私は、産まれてくる子どものことが気がかりでならなかったの。でも、M さんはちがった。『ワタシがカレの子どもを産むのは自由だ。奥さんには関係のない話。カレの親からも、ムスコの子どもを産んでくれ、っていわれた。だから、ワタシの勝手にさせてもらう』と、そこまで聞いて、私は自分の耳を疑ったわ」

それを聞いた私までも、自分の耳を疑った。

義家族の規格

「もう予想は付いていると思うけれど、M さんが住んでいるマンションはカレの実家のすぐそば、つまり、私たちの住まいより（カレの）実家に近い距離にあったの。もちろん、M さんは元々被災地の中心部にいたらしいから、引っ越してきたわけよね。その引っ越しから、マンションの資金や生活費など、M さんがカレの子どもを産むと決まってからは、義父母が面倒を見ていたらしい。おおよそは、私に M さんの情報を教えてくれた知り合いから聞いてはいたけれど、まさか、義父母から直接『ムスコの子どもを産んでほしい』と言われたことは知らなかった。その後、カレに確かめると、『妊娠のことを、最初におやじに相談したのが間違いだった』と言っていた。義母に

も話を聞いたんだけど、『本人が“産む”というのだから、しょうがない。私たちにとっては、内孫には違いないから』という返事だった。結婚して15年ほど経っていたかしら、その間、義理でも、お母さん、お父さんと呼んでいた人たちからの言葉よ。不妊治療しているときは、応援してくれていたし、その後、スティーブンス・ジョンソン症候群になり、その後遺症を生涯抱えて生きていかなければいけないことや、その裁判もまだ終結していないことも知っていたはずなのに……。もう、私は、この家族の一員であることはできない。ううん、それ以上に、家族でいたくない、って真剣に考えるようになった。ああ、これが義理の家族というものなのか、と失望したの。その時の私は、まるで、ギリシャ神話の『プロクルステスの寝台』で休む旅人の気分だったわね。その家族にとって、規格外の人間だったんだから。そう、その家族の規格に該当したのは、Mさんだったのかもしれないわね。あら？ごめんなさいね！ちょっと発言が過激だったかしら？」聴き手としては、共感を超え、同調の域に入っていたのかもしれない。皮肉たっぷりに言ったつもりの「たとえ話」も、そう過激にはきこえなかった。B子さんは自分を旅人に例えたのであって、決して誰かをプロクルステスに例えたのではなかったからだ。しかし、この例え話には一理ある。B子さんの当時の義家族は、ギリシャ神話ほどではないにしろ、随分古い時代の家族形態を重んじる個人の集合体であったことは明確である。

受け継がれた家族概念

「連載9 不妊と家族の相関関係」で示唆

したように、家族の最高権力者として、その社主である義父は最も大きなパワーを保持していた。その結果、後継者である長男夫婦に跡取りが産まれない現実と、(偶然か否かは定かではないが)長男の子ども(=跡取り)を産もうとする女性が現れたという規制事実を踏まえ、「B子さんの同意なく、内孫を産むMさんを家族として迎え入れる」という、義父の決定が下されたのだろう。「B子さん夫婦の子どもの問題」に対する決定権は、やはり、家長である義父にあったのだ。本文では割愛するが、Mさんという女性が現れる以前にも、義父からB子さん夫婦に「子どもをもつことへの要請」が幾度もあったという。なかには、具体的な案件として、「海外から若い女性を呼び寄せ、B子さん夫婦と同居したうえで、その女性に跡取りを産んでもらう。その後は、その女性を乳母として雇用し、生活の面倒をみること」への打診も含まれている。世のフェミニストにとっては、聞き捨てならない話に違いない。

しかし、本エピソードの問題の本質は別にある。世代間に受け継がれた家族観や家族概念は、次世代のカップルに深刻な影響を与える、という点である。

例えば、本ケースの場合、B子さん夫婦が決断した不妊問題解決への選択肢は、「不妊を治療すること」、つまり、不妊の医学的解決にあった。当時、通院する彼女には、過干渉とも思えるほどに義家族からの応援があったという。昭和ひとけた生まれの親世代からみると、次世代夫婦の選択を尊重し推奨していたことになる。ここまでは、B子さんの原家族、義家族共に、同じ方向にベクトルが向いていたに違いない。しかし、

夫婦の選択肢は、当初の目的を果たすことなく、かわりに、医学的リスクを負う結果に終わる。しかも、後遺症という身体的リスクをB子さん個人が負う結末を迎えた。

この時点で、少なくともB子さんの夫と義家族とは、ある方向へベクトルを変えた可能性がある。それが、義家族の親世代から次世代へと受け継がれた家族観であり、血族の継承を最も重要とする家族概念であった。一方で、B子さんの原家族は、後遺症を負った娘の身体を案じ、「夫婦仲良く」というメッセージを親世代から次世代へ送り続けていた。(これは、後に記述するB子さんの両親の語りで紹介する。)いずれの親世代も次世代へと、彼らが構築する新しい家族に大きな影響を与えていることが分かる。この場合、B子さんの夫が原家族から受け継いだ家族概念は、「子どもは血族を継承する象徴」であり、そのためには、夫の血を受け継ぐことが絶対条件であったのだ。対するB子さんには、「夫婦共に健康で仲が良い」とする家族観と、子どもはいないよりいたほうがいい、といった家族概念があったという。その前提で、不妊に悩む娘が不妊治療することを応援していた。それぞれの親世代から受け継いだ家族観と家族概念は、次世代夫婦の不妊問題に亀裂をもたらす形で表出したともいえる。本ケースにみる、世代間境界破りが一因となった次世代夫婦関係の崩壊は、不妊問題だけにとどまることなく、次世代を担うカップルの大きな課題でもある。

次に、先述したB子さんの元義家族のエピソードは、不妊女性の人権を大きく侵害するケースか否かを考察する。

B子さん夫婦に介入したMさんの出産は、

夫婦の婚姻関係が破たんすることを前提としたものであり、結果として、義家族はそこに加担していたことになる。しかし、ここでは、あえて誰が侵害したかを問うことは避けたい。結果として、誰の不妊問題が解決したのか、誰が利益を得たのか、は容易に推測するところであるが、最も重要なのは、そこに誕生した子どもの利益は守られたのか、という点には疑問が残る。仮に、本エピソードに、第三者の関わる生殖医療技術が解決手段として選択された場合を考えてみよう。Mさんという女性の存在を、代理出産、もしくは代理母に置き換えると、一見、B子さんのいう“ドロドロとした愛憎劇”とは違ったものに見える。しかしながら、B子さんの同意なく、Mさんの出産があるとすれば、背景に国内外の違いこそあれ、それは、前述した「インドで代理出産を依頼した日本人男性のケース」と同様のケースとなる。もちろん、男性不妊問題を解決する際にも、同様の事態が発生する可能性がある。後日談として、インドで出生し一時無国籍となった子どもに終始付き添い日本へ連れ帰ったのは、その男性の妻ではなく、男性の実母であった。

かつて、生殖医療が現在ほど進化していない時代にも、精子・卵子提供や代理出産とは違った形で、第三者の介入を得た「不妊問題の解決手段」は、確かに存在した。しかし、本稿にある、過去の不妊にまつわるいずれのエピソードも、当事者の痛みを緩和し、家族の問題を解決する手段とは程遠いといえるであろう。特に、第三者の介入した不妊問題の解決手段には、当事者夫婦と、そこに介入する第三者、そして家族を含む社会の、それぞれの合意を得たうえ

で実行されることがその前提となる。これは、生殖医療が社会的選択肢の一つと社会認知されるうえでの必須条件でもあり、加えて、男性および女性不妊当事者の利益を損ない、家族の危機を誘発する形で第三者が介入することを許さない社会に、必要最低限の制約であると考える。

以上のように、不妊問題は、最先端科学といわれる高度生殖技術をもってしても、十分な解決手段にかわるものではないことは明らかである。また、諸所の先行研究にあるように、「生殖医療の是非」に限定した論旨により当事者家族の不妊問題が解決されることはありえない。不妊現象のような、社会が解決手段をもたない問題には、当事者とその家族に対して、より多くの選択肢を明確化するなど、その社会的解決基準を早急に提示すべきであると同時に、現在、不妊を家族の問題として、秘密裏に解決される際に発生する様々な人的リスクに対応する、援助手段の構築を忘れてはならない。

原家族同盟

「本当にいろいろあったけど・・・私にとって、唯一の救いは、早い時期に、“このまま、ここにいちゃいけない” って気がついたことかな。だから、自分の意思で“家族をやめよう”って決めることができた。私には、身近に大切な友人がいて、遠くには長年の親友や、実の妹のように可愛い従妹たちもいた。そして、誰よりも私を愛し、強い人間に育ててくれた両親の存在があった。そのことに、あるとき、ふと気がついたの。ずっと変わらずあった存在なのに、不妊で悩んでいた頃には、あまり深く考えずにいた。周りが見えなくなっていたのかもしれないわね。

私を大切に思う人たちがこんなに大勢いたのに、私が目を向けていたのは、“子どもができないことについて、何かをいう人たち”ばかりで・・・気にしていることを指摘されると、その部分ばかりクローズアップされ余計気になる、その繰り返し。だから、気がついたというより、目覚めたという表現のほうがふさわしいかもしれない。ああ、私は、自分自身を誰よりも粗末にしてきたんじゃないか、って思った。ここから反省したの。そのきっかけとなったのは、Mさんに会った後、実家の両親に一連の出来事を打ち明けたとき。実は、それまで、両親には何も言えずにいたの」

先ほどとはうって変わった表情を見せ、時折胸に手を当てながら、まるで、許しを乞うような仕草で静かに語った。

「あの事故の後、いつも私の体調を心配する母と、顔をみるたび“仲良くやってるか？ 幸せに暮らしているか？”と、冷やかすように質問する父だった。ある日、久しぶりに実家に帰り、親子の挨拶が済んだあと、両親に話をしたの」

この後に続く語りは、B子さんと彼女の両親とのあいだに口頭で交わされた、実際のやり取りを本人が再現したものである。以下にその要約を、可能な限りB子さんの語りのままに記す。

<父>

父:「何ということをして！ゆるさん！お父さんは、Kくん(B子さんの夫)を絶対に許さん！そんな・・・そんなことがあっていいものか！人として、男として、していいことと悪いことがある。そんなこともわからない奴じゃないはずだ！確かに、お父さんはB子が

可愛い。でも、Kくんも本当の息子のよう
に、可愛く思ってきたんだ。一体、何があ
ったんだ？お前たちに何かあったのか？い
つも、あんなに仲がよかったじゃないか」

「私たちに問題があるんじゃないの。私た
ち二人の問題じゃなくなったから、こうな
ってしまったの」

父：「その女の人はどういう人なんだ？」

（友人と3人で話をした経緯を説明）

父：「そういう女性は世の中にたくさんいる。
問題は、そういったことにどう対応するか
で決まる。向こうの親御さん（義両親）は
何も言ってこないが、どういった了見をも
っているか知っているのか？」

（Mさんへの、義両親の対応を話す）

父：「何ということだ・・・ひとの娘を・・・ひ
との娘をなんと思っているんだ！！ひとの
親ならできることじゃない。向こうにも娘
がいるじゃないか。自分の娘が同じことを
されて平気なはずはない。Kくんも悪いが、
向こうの両親は、もっと悪い。子をもつ親
のすることじゃない。まともな親なら、ま
ず、B子に謝罪を入れ、次に、その女性に
それなりのけじめをつけさせるべきだ。そ
れを・・・自分の息子の不始末を棚に上げ、
B子の知らないうちに、その女性の面倒を
親がみるなんて、聞いたことがない。でき
た子どもはしようがない。その責任は、当
然とらなきゃならない。しかし、なぜ、B
子に何もしようとししないんだ。こんなこ
とになって、親として、責任をもって、こ
ちらに報告すべきではないか。なんという常
識の無い！無責任にもほどがある。お父さ
んたちは（それでも）構わない。でも、B
子には、義理の親としてなすべきことがあ
るんじゃないのか。まがりなりにも、家族

になって、もう何年になる？たったひとり
の娘に、こんなことをされて・・・こんな屈
辱はうまれて初めてだ。そんなところ、い
つまでもいなくていい。早く帰ってきなさい。
それより、まず、Kくんをここへ呼ん
できなさい！」

「話せばこうなることは分かっていた。だ
から、ぎりぎりまで、実家に報告するこ
とは避けていた。起きたことの重大さを知
っていたから。言えば、（夫婦の関係は）終
わりだと思っていたの。結局、私はカレを
実家に呼ぶことはしなかった。父の意向は
伝えただけど、どう考えても修羅場になる
のは目に見えていたから・・・それに、私の
なかでは、徐々に見切りをつけ始めていた
の。もう、どうがんばっても、関係は元
には戻らないだろうって。それに、子ども
もじき産まれてくるころだったしね。なんか、
これ以上“事を荒立てたくなかった”って
いうか。一つだけ、心残りなのは、しばら
く、いや、もっとかもしれないけど、父の
気持ちはおさまらなかつただろう、とい
うこと。それだけが心残り。昔から、晩酌
程度のお酒は夕食の際にたしなんでいた
けれど、「最近お酒の量が増えた」と言
って、母が心配していた時期があったの。
そういえば、母は、私が父と話している
あいだ、終始うつむき、そっと鼻をすす
っていたな・・・父にも母にも辛い思
いをさせた。申し訳ないことしたな
あって・・・つくづく親不幸な娘
だったなあって、今でも思ってる」

<母>

母：「一緒になって50年は経つけど、お父
さんがあんなに怒るのを初めてみた。同
じ男性として、お父さんは厳しいことを言う

けれど、今回ばかりは仕方がないわね。向こうのみなさんは、それだけのことをしたんだから。Kくんも、もう後には引けないでしょう。気持ちの優しい人だから、自分で何とかしないとイケないと思ってるんじゃないの？今はまだ、子どもが産まれてないから離婚したくないと言っているけれど、子どもが産まれたらそうはいかない。その時はKくんも、もう、B子をあきらめるしかないでしょうよ。お父さんも、お母さんも、B子が可愛いだけに、Kくんの“自分の子がほしい”気持ちは理解できる。でもねえ・・・もっと、別の方法があったんじゃないかしら。自分の奥さんをこんなに悲しませて・・・B子もつらいだろうけど、一番つらいのは、Kくんかもしれないね」

「母は、わりと寡黙な人で、陽気で話好きな父と会話しながら、いつも笑顔で隣に座っていた。それでも、肝心な時には、常に冷静で客観的な意見を言ってくれる、私のよきアドバイザーだった。その時も、激怒する父とは対照的に、私に起きたことを静かに悲しんでいた。私に、というより、起きた出来事そのものを、悲しんでいたのかもしれない。“誰が・何が悪い”ではなく、“どうすればいいか”をいつも一緒に考えしてくれる母だったから。でも、さすがにあの頃は、母も疲れ切っていたようだった。毎日父をなだめながら、私の相談に乗ってくれていたので、大変だったと思う。母は、多くを語らないけれど、とても胸を痛めていたはず。母にも苦勞かけた。あ、そういえば、もしかすると、あのときいた“母のひとこと”が、その後の私の人生の決定打となったかもしれない。母はね、こうだったの」

母：「すべて、B子次第よ。たとえ他の女性に子どもができて、B子がKくんの奥さんであることに変わりはない。B子がそれでいいなら、離婚しなければいい。お父さんもお母さんも、一緒に向こうの家に行き、Kくんのご両親に話をつけてあげる。でも、それでB子は幸せなの？お母さんは、B子が幸せになれるのなら、どんなことでもする。これは、お父さんも同じ。親というのはね、わが子の為なら、自分たちがどんな目にあっても構わないと思っているものなのよ。だから、自分で決めなさい。お父さんとお母さんは、B子のしたいように、させてあげたいと思っている」

「母のことばがあったから、私は自分で決めることができた。あの家から出ていこう。家族の元へ戻ろう、って」

最後にひとこと、「以上で、私の話は終わり」と結び、その日の話は一旦終結した。

第13章 リセット

記録は語る

最後にB子さんと会ってから、ずいぶん時がたつ。その間、私は彼女の語りを記録することに専念していた。

これまでに記述したB子さんの語りは、彼女の結婚後、不妊に悩みはじめた頃にはじまり、その婚姻関係が終わるまでの「家族の物語」であり、同時に、互いの関係を深め、B子さんの経験を共有した記録でもある。振り返れば、彼女は実に、情感を込めて私に語りかけていたと思う。悲しい体験を悲しく、苦しかったころの出来事を苦しそうに再現した。目前に展開する物語は、ときに時空を超え、あたかも聴き手である

私が、いま体験しているかのような錯覚を覚えることもあった。途中、時折見せる満面の笑みに現在の彼女をみることで、かろうじて現実に戻り、その役目を全うすることができたのではないだろうか。その関係に、同じ不妊当事者体験をもつ“ピアであることのリスク”が生じていたことは否定できない。ときに、「傾聴と共感」は同調にかわり、さらに、自身が経験したことの無い「話し手の体験」を聴くことで、新たな痛み・苦しみを追体験するという、同質の体験をもつピアならではの危険性をはらむ面接であった。私にとって、それほど疲労感を覚える話し手であったことが、今は理解できる。同時に、面接を振り返る作業が、いかに大切かを実感している。

日頃、対人援助職者として、自身の持つ専門性とその力量を自覚し、心身の安定に留意しつつその役割を果たすことをこころがけている。しかし、時として、自身の専門性から外れ、思いがけない方向へ展開する語りに戸惑うことがある。今回のB子さんのケースがそれに相当する。当初、「不妊体験を聴く」ことにその目的があったB子さんの語りは、「不妊を経験した家族の物語」として結末を迎えた。そこには、不妊現象が巻き起こした様々な問題を提起していたように思う。

書きつづった記録を読み返し、さらに、尋ねたいことや確認したいことがあった。彼女はなぜ、いま、私に、それを語ったのだろう。そして、語り終えたいま、彼女は何を思うのであろうか。記録をたどりつつ、脳裏から払拭できないそれらの疑念を、先日のお礼に添えて、B子さんに問うてみた。

最後の願い

あまり日を開けず、B子さんから手紙が届く。そこには、先日送った質問に対して、丁寧に回答する彼女の文面がつづられていた。本稿では、B子さんの意志により、以下に原文のまま転記することとした。

「拝啓、先日は長時間にわたり、私事の浮かぬ話に耳を傾けていただき、誠にありがとうございました。当初は思いも及ばなかったことですが、その後、実にすっきりとした気持ちで日々過ごしております。あらためて申し上げますが、これまでにお話した内容は、私の結婚生活の一部分にしかすぎません。もちろん、長い年月不妊に苦しんだことも事実ですが、結婚生活の大半を、元夫と仲良く楽しく、幸せな時間を過ごしたことを言い忘れておりました。また、その昔、私の義家族だった方々も、皆心優しい勤勉な方々であったことをお伝えしたく思います。また、そんなつもりはなかったのですが、不妊の話をするときは、辛い・苦しい思いばかりが先にたち、悲劇のヒロインになった気分で話す癖があるように思います。あれから既に15年がたつというのに、今回あなたに話すことで、あらためて気づきました。

実は、先日届いたあなたの質問の答えを探しているときに、とても大事なことを伝え忘れていたことを思い出しました。それは、5年前に亡くなった父の遺言です。父は生前、こんなことを私に言い残していました。

「お父さんは、生きていうちに自分の孫をみることはできなかったけれど、B子という宝を授かったんだから幸せものだ。自分の娘は本当に可

愛い。可愛いだけに、そのおもいをB子にも経験させてやりたかった。そう思うと、B子が不憫でならない。お前には兄弟姉妹もない。だから、お前が再婚しない限り、お父さんとお母さんが死んだ後、天涯孤独の身になることは覚悟しておきなさい。そして、次に結婚するならば、B子に子どもができなくてもいい、という人と一緒にになりなさい。お前を可愛く思う男性は、世の中にたくさんいるはずだ。そんな男性と一緒になればいい。もう、済んだことだが、Kくんのしたことは許せないことだ。しかし、同じ男性として、彼の気持ちもわからないでもない。自分の子どもはみてみたいからな。Kくんの失敗は、ただ一つ。B子を手放した事。そこで、男としての人生は、終わったことだろう。まあ、彼の子どもが無事育っているのなら、それでいい。父親として元気で暮らしているのなら、それはそれでいいことだ。お父さんは、いまB子が元気に頑張っている姿をみているだけで安心だからな。B子は、いつか自分の経験を誰かの役に立てたいと考えているようだが、それをお父さんは心配に思う。世のなかには、いろいろな人がいるからな。でも、B子は何も悪くない。人に後ろ指さされることは、何一つしていないんだから、自分の言いたいことを言えばいいんだ。お父さんたちが、いつも応援していることを忘れるなよ。

ただ一つ、お願いがある。遺言だと思って聞いてくれ。今後、もし、この話を誰かにすることがあるならば、それはお父さんが死んだあとにしてくれ。B子の経験が誰かの為に役に立つのかどうか、お父さんにはよくわからない。しかし、B子と同じように、たくさんの不妊に悩む人たちが、今のお前をみたならば、それは励みになるだろう。お父さんは、お前に十分なことをしてやれなかったかもしれないけれど、お父さんがお前に話したことや、お前をどんなに可愛く思っているのか

を話してくれたらうれしい。でも、それは、お父さんが死んだあとにいいだろう。B子は、お父さんたちも経験したことのないことを経験した強い子だ。お父さんは、自分の娘を誇りに思う。恥ずかしくて他人には言えないがね。お前ならきっと、思うように生きていけるだろう。お父さんが死んだあとも、お前の人生は続く。できれば、お前を本当に大切にしてくれる男性が現れてくれると、なお嬉しいんだが・まあ、お前の人生だ。お前の好きに生きればいい。お父さんは、お前がさびしくなければ、それでいい。そのことを忘れないでくれ」

以上が、父が残した事ばです。もう、お分かりいただけたでしょうか？私が、「なぜ、いま、あなたに」話したのかを。父が亡くなって5年が過ぎ、あなたに“それを話すこと”で、父の願いをかなえる私になれたのです。娘として、「父の最後の願い」にこたえる為にできた事なのかもしれません。

遺言にもあるように、私があなたにお話しした理由は、「私の経験を活かしていただきたい」とのおもいからです。以前にも申し上げた記憶があるのですが、私の体験を誰かの為に役立てるには、「たくさんの個人の体験」が必要な事、そして、いまこの瞬間も不妊に悩む人がいて、次々に同じ悩みを抱える人たちが増えていく現状を、あなたから知りました。だからこそ、いま、伝えたいと思ったのです。私と同じおもいをする人が現れないように、二度とこのようなことが無いようにとの思いから、あなたと一緒に声をあげたかったのです。

私の願いは、①不妊問題の解決に、情報提供や家族に起きる様々な問題に対応する相談業務などの人的支援を、②実子を望め

ない当事者カップルに、子どもを育てるチャンス、社会に導線として準備してほしいという2点です。私は、その導線に敷き詰める小石のひとつになりたいのです。先日、一緒に参加したシンポジウムの登壇しておられた当事者の方々も、おそらく同じ思いなのでは、と考えます。先人の知恵、とは言い過ぎかもしれませんが、「過去の経験」が役立つとすれば、例えそれが成功であれ失敗であれ、資源のひとつになると考えます。

私の場合、両親やみんなの支援を受けて、より幸福な人生への距離が縮まりました。その支援無しには、いまの私は存在しなかったのです。でも、これまでの人生は、不妊がそうであったように、決して自ら選んだものではありません。幸せになりたくて結婚したのですから、離婚もしかり。そう考える事ができるようになったのは、ごく最近のことです。でも唯一、いまだに不妊だけは、どう考えても理不尽で、つじつまが合わないまま。私は、今も時々、“神さま。なぜ、私に不妊という試練をお与えになったのですか？”と問うことがあります。そう問いかけながら、これからの人生を、自分でつくっていきこうと思っています。

パートナーと共に送る人生に起こる様々な出来事へは、二人にとって最善の選択肢を見つけ力を合わせて乗り越えて欲しい。いま、不妊に悩むご夫婦に、私はそう伝えたい。最近、かつて一度は家族となった人たちにも感謝できるようになりました。その方たちと共に、家族として過ごした15年は、「家族と子ども」について真剣に考える好機だったと思えるようになったのです。また、現在までの、その後の15年間は、そ

の時産まれた(カレの)子どもを受け入れ、その成長を願う親性が育つ期間だったのかもしれない。そして、「経験を伝える自分」に成長するため、同時に、亡き父の願いをかなえるために必要な時間だったと考えています。その間、どんな時も、何が起きても変わらないのは、いつも私を見守り続けてくれた人々でした。私を導いてくださった先生方をはじめ、身近な友や遠くの仲間たち、さらに、日々声を掛け合う隣人など、今ではみんなが、私にとっての家族です。

実は、あなたにお話した内容は、“私が墓場まで持っていきこう”と密かに思っていた出来事でした。誰にも話せない、と勝手に思い込んでいたのは、自分自身だったのです。自分で自分を縛っていたことに気付きました。これからも、何か思うことがあれば、あなたに聴いてもらいたいと思います。そして、私にできる事があれば、いつでも声をかけてください。一緒に声をあげていきたいと思っています。今日は随分長くなりましたね。それでは、この辺で失礼します」

B 子さんから届いた手紙の其処此処に、私のおもいがつづられていた。手紙にある彼女の願いは確かに、現在、社会に潜在する「不妊当事者家族の課題」とも重なる。それらを形にし、社会システムとして確立することが、私に課せられた次の使命であり、それが、彼女の願いでもある。この日から、私たちは、共に生きる運命共同体となった。

<終わり>

おわりに

本連載は今回で完結します。登場した人々は、皆それぞれの立場で不妊を語り、家族を語る、実在の/実在した人物です。彼らはインタビューの中で、“その時「家族」に何が起きたか”を語ってくれました。

第1章に登場するA子さんは、筆者が取材する過程で出会った素敵な女性です。彼女はかつて、生殖医療技術のない時代に不妊を体験し、その時代を生き抜いた女性のひとりでもあります。現在、とかく不妊は、生命科学技術や生殖医療の問題として取り上げられがちですが、A子さんにとっては、“それ以前の問題”だったのです。

本書の大半は、「不妊」に人生を翻弄された当事者女性B子さんの物語です。その語りには、B子さんとパートナー、また、家族として“わが子の不妊”を経験したおふたりのご両親など、実際の家族の他に、姉妹・友人などが登場します。なかには、この世に誕生した新しい命のエピソードもありました。彼らもまた、かつて不妊を経験した家族でした。

本連載の中核をなしたのは、B子さんと、B子さんを取材する過程で筆者が出会った人々が語る「不妊と家族の物語」です。彼女は、共に暮らした家族の思い出を記憶のかなたに消し去ることもかなわず、これまで、それを語る機会すらなかったといいます。

現在、「当事者の6組にひと組が通院する」不妊治療を経験したB子さんの、かつて生活を共にした家族を襲った不妊問題。その事実の語りには、血の継承問題、女性の性役割、家長制度の負の遺産、利己的な

利益に出産を利用する女性、親のエゴなど、さまざまな人間の欲望が潜在し渦巻いていました。

筆者は、B子さんの語りを通して、不妊を経験した家族の足跡を共にたどり、彼女の家族と、その人生を翻弄した不妊の実態をみなさんに知っていただきたいと思います。本連載を読み終えた今、あなたが「不妊は他人事ではない」と実感してくださることを、筆者は切に願います。不妊はあなた自身に、また、あなたの子どもや身近な大切な人に、いつか起こり得る出来事なのです。

“それ”は誰にでも起こり得ること。

何故か、“その時”が来るまで、誰も何も伝えることをせず、知る必要を感じることもなく、「治療すれば大丈夫」と間違っと思いつ込んでいること。誰もが「自分に・家族に起きるはずはない」と思っている・思いたい・思っていたこと。これまでに**“起きた事実”**はすべて沈黙の闇に葬り去り、過ぎ去った過去として人々の記憶から抹消し、語り継がれることのなかった家族の問題。

—それが、筆者の知る「不妊」です。

【謝辞】

本連載は、2012年10月「A子と不妊治療—日本初の不妊治療医療過誤訴訟を経て—」（晃陽書房）に書き下ろし、一冊の著書として刊行させていただきました。刊行にあたり、沢山の皆様にお力添えをいただきました。この場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。

完